

平成30年度兵庫県景気動向懇話会結果について

- 1 日 時 平成31年2月15日（金）10:00～11:45
- 2 場 所 兵庫県庁西館2階 企画県民部会議室
- 3 出席者 アドバイザリースタッフ 小沢 康英（神戸女子大学文学部教授）
尾下 優子（神戸大学大学院海事科学研究科講師）
佐伯 義広（日本銀行神戸支店営業課長）
豊原 法彦（関西学院大学経済学部教授）
丸山 佐和子（近畿大学経済学部准教授）

※五十音順

事務局 企画県民部ビジョン局長

企画県民部ビジョン局統計課 課長外3名

産業労働部政策労働局産業政策課 1名

4 議事（意見交換）

(1) 兵庫CL I（景気先行指数）の概要について

【要旨】

兵庫県と関西学院大学産業研究所が連携して兵庫CL I（景気先行指数）を作成している。兵庫県で採用されている先行指標7系列のうち、あてはまりのよい鉱工業製品在庫率指数、新規求人数、企業倒産件数の3系列を使い、OECDの作成方法に従って作ったものが兵庫CL Iである。

兵庫CL Iの基調判断は、この懇話会で一昨年、昨年と議論した景気動向指数の基調判断を用いている。

2018年11月速報の兵庫CL Iの基調判断は弱い改善となり、弱い景気拡張局面であると読み取れる。

また、昨年度よりアジア太平洋研究所から情報提供を受けて、関西府県のCL Iとの比較ができるようにしている。

2018年1月から12月を見ると関西地域2府4県は横ばい、悪化から足下改善になってきている。兵庫CL Iのもう一つの特徴は、景気の山谷を自動的に算出していることである。この山谷は固定ではなく、指標データを更新するたびに直される。直近のデータをみると2017年1月に景気の山が見られる。

補足として、兵庫県CL Iも関西CL Iも発表されている指数を組み合わせるとこういうことができるという研究的な形として作成しているので、確たるものではなく、行政的なものとは種類が異なる。

(2) 兵庫県版CL Iの見える化と改善について

【要旨】

兵庫県版C L Iの統計データをペーパーとして渡すだけではなく、実際に使ってもらえるような環境をホームページ上でできるようにしたのが見える化である。

個別指標加工プロセスチャートでは、O E C Dが決めた基準に基づいた先行系列の各個別指標の算出方法をグラフでわかるようにしている。

各指標をみると、指標によっては兵庫県の特徴として1年に1回の循環サイクルがはっきり見えてくる。

兵庫県は受注生産が多く、在庫の中で仕掛かり在庫が多いという特徴もみることができる。

また、関心がある年にスケールを動かすとユーザーとしてみることもできる。

個別指標ビジネスサイクルクロックチャートでは、縦軸を水準、横軸を成長率にして循環サイクルが見えるようにしている。

これにより、兵庫C L Iは先行指数の中で循環サイクルが綺麗に円に見える3指標を選んでいることがわかる。

過去1年間の予測結果をみると、兵庫C L Iは兵庫C Iより3か月程度先行しており、景気の先行きについて見通せる。

C L Iと3期先行C I一致指数試算値の符号比較では、C L Iから見て上がるか下がるかの景気方向があっていたかどうかをみたもので、あてはまり率は75%であったが、採用している指標が先行系列7指標のうち3系列と少ないので、実際の景気の振動より反応が遅い傾向がある。

日本では景気動向指数を用いて景気基準日付を定めているが、O E C DのC L Iは今が知りたいために出しており、C L Iで景気の転換点をみるには、指数が少ないため限界がある。

【主な意見】

- 兵庫県版C L Iの見える化の中で「原データから異常値を外すとトレンドが見えてくる。トレンドを除いたものがコンポジットで、コンポジットを景気分析に使っている。」とのことだがトレンドを除いた後の指標は何を表しているかと理解して、経済を見ていけばよいのか。
- C L IはO E C Dが作成している景気循環をあらゆる指数で、O E C Dの加盟国間の比較するためにでてきたフィルターの考え方である。
経済が伸びている国、これから伸びようとする国、安定している国を比較していくときに、単に成長率だけでは比較できないので、振幅を見ていかなければならない。
例えば、右肩上がりの国があればその中で振動していく様子を見ていこうとする中で、トレンドを除去しようという考えが出てきた。
C L Iの個別指標をみることにより、減っている下降トレンドの中でも増えている、増えている上昇トレンドの中でも減っているという小さな振動が明確に出てくる。
- 兵庫C L Iと、他の関西府県のC L Iとの比較が可能となり、兵庫の景気動向の特性が一段と理解しやすくなった。また、C L Iの特徴の一つに、景気の実谷が自動的に算出され、

この山谷は固定ではなく、山谷の数も多めとなることがあげられる。C L I は現状および少し先を把握することを重視するためであり、景況の変わり目を柔軟に分析する有用なツールとして期待できる。ここ数ヶ月の間で中国経済の減速の影響が出始めているが、C L I を用いた分析において、中国の影響は少ないのか、それともこれからいろいろ出てくるのか、注視していくことが大切となろう。

- 中国の影響は大きいと思う。中国で多く製造機械をつくっているし、関西の化学関係の製品はほとんど中国にいらっていると思うので、それらがなくなるとどうなるのかなというところ。

- 景気の現状の印象として、米中貿易摩擦の影響は平成 30 年の景気指標にはまだ出てきていない。中小企業の指標は一般的に（全体や大企業に比べて）悪い傾向を示すことが多いが、今日の資料ではまだよい傾向が出ている。

全国は、内閣府の景気動向指数研究会でも第 1 5 循環の景気の谷以降、景気の山はつかないとのことだが、兵庫県も同じ判断でよいと思う。

懸念材料が出てくると素材関係の指標で、景気に先行している分野ではよくない兆候が出ている印象がある。今後、景気の子谷をつけるための情報として、それらの景気の指標を注意して見ていく必要がある。もし景気に大きな変化があつて子谷をつけるとしたら来年度になるのではないかと思う。

C L I は子谷が細かくつく傾向があり、今のように景気が長期化している時には、小さな子谷がつくので、その変動を使うのに有効である。

ビジネスクロックチャートは、在庫循環図では判断がつかない場合でも、指標によっては循環がわかりやすく出ており、今の状況を判断しやすい見せ方のツールを示せているおり、見せ方の選択肢が増えてよいと思う。

C L I を関西の他府県に应用するとき、兵庫県をベースに作成しているので、どうして先行系列のうちこの 3 つの指標を選んでいるのか、また、C L I の作成方法についても、成長している経済はいつもより多めに動くのでトレンドを除くということをわかりやすく説明できるようにしておく必要がある。

兵庫県は統計指標を作成するだけでなく、このように活用方法、使い方もどんどん考えて提案しており、よいことだと思う。

→【事務局】C L I について、近畿府県の会議等で情報提供しており、景気の指標のなかに C L I を取り込んでいる県もある。今後も順次 P R していく。

- 関西経済はスマートフォンの普及に伴う電子部品の生産状況や、中国の景気に左右されるところもあり、兵庫県の経済が輸出に依存している割合が多いのであれば、これから世界経済の動向が大きく影響してくると思う。

今回の話ではあまり感じなかったが、オリンピック需要の経済効果を47都道府県で分析した結果、兵庫県にもそれほど大きくはないが、波及影響はあるので、特需がなくなったあと、景気が落ち込む可能性もあると考えている。

どこの企業も人材不足、人手不足の話が出ている中、一致系列の有効求人倍率（C6）は長期間上昇が続いており、景気の判断指標として、今は使えない状態になっている。

ほかに適当な代替指標がないし、今までの統計との整合性もあり、仕方がないと思うが、有効求人倍率（C6）が高いから景気がよいとはいえなくなっている。

→【事務局】有効求人倍率（C6）については、他に適当な代替指標がないか引き続き検討していく。

- ・ 先行系列の新規求人数（L4）は頭打ちになっており、伸びていない。一方で、有効求人倍率（C6）はずっとプラスになっているので、今後どのような動きになっていくか見ていく必要がある

大阪万博が動き出し、統合型リゾート（IR）も動くようになると、景気の起爆剤が続いていくことになり、関西経済にとって大きいイベントとなっていく。そういうものがないと、高齢化に伴って経済も縮小化していくことになる。